

この子供たち

(4)

イーデイス・ウォートン作

松原至大訳

家庭教師さがし

ホキータ夫妻の観迎ぶりは、予期したとおりであつた。グラランド・キャナルにのぞんだホテルの大ホールにはいると、ボインは、大勢の人々の中に、きわ立つてはなやかな姿のクリフ・ホキータを見つけた。ハーヴァード時代そのままで、ただ身体とシガーとが、より大きくなつていただけであつた。初めの間は、ボインがわからなかつたが、

「やあ。」と、大きな声が、ホールに響きわたつた。そして、ホキータと話し合つていた、クウェーカー教徒の着る地味な服に、途方もないたくさんの真珠をつけた、やせぎすの若い婦人が、さげすむように口をとがらせて、ボインの方に顔をむけた。その目がボインに注がれると、とがつた口がためらつた。その婦人は、ボインの祖母が、帽子の型をつけるのによく使つた木製の胸像のような、おつとりとした滑らかな卵形の顔をしていた。光沢のあるとき色のくちびるをして、まぶたの上に描きでもしたような、後の方にカーブした長いまつげのある、青白い目をしていた。いやに落ちついたその態度は、顔の調和がみだすまいとするのだと、ボインは思つた。

「まあ、マーティンさん。」と、抑揚のない声でいつて、指輪で重い手をさしのべた。ボインは、かつておしやべりであつたジョイス・ホキータの前に立つてゐること、そして今も彼女は自分に会つたことを、喜んでゐるのだということを意識した。

「私は、ふけましたから、あなたには、おわかりになりませんでした。でも、あなたは、どこでもわかりますわ。」ジョイスは、昔と同じような、滑らかな、美しい声であつた。

「おふけになつた——あなたが。」と、ポインは口ごもつた。けれど、ジョイスが味わなければならなかつた気持ちを、夫が破つてくれた。

「知つているのか、そうか。以前よりも少しもふとらないな——ところで、君は今、ぼくのせがれの友だちだつてな——そうだ、チップストーンではないよ。テリーのやつのだ。やあ、どうしてこのキャラヴァンは、やつてきたのかな。ジョイス、ぼくは、言つといたんだが——みんなは、ペンション・グリマに宿をとるように言つてくれた。チップをのぞいて、みんなだよ。チップストーンは、手ばなすわけには行かないからな。やあ、みんなやつてきた。いつものように、ジュディーが先登で。やあ、チップ、どうした。げんこを出してごらんよ。」こういつて、ホキータはジュディスの手から、この未つ子をとつた。ほかの子供たちは、少からずがつかりしたが、それでも、父がこの最後の傑作の美しさを眺めつくすのを待つていた。

「ジョイス、ごらんよ。この前よりも、チップのやつ、五ポンド重くなつたよ。ちよつと、ふくらはぎに触つてごらん。テニスのボールのようにかたいよ。よく世話をしてくれたね。ジュディー。さあ、この子を、おがさんの隣りの部屋へ連れてつておくれ——テリー、お前のふくらはぎも、強くなつたかな。」

この時、パンは待ちかねて、

「ぼくのもの見てね。ぼく、さかさまに見せられるよ。」と、大きな声でいいながら、とんぼがえりをした。プランカは目を大きく見はつて、黙つたまま、母親のちぢらせた金髪を見ていた。やがて、ジョイスは、かわるがわる子供を、真珠のきらめく胸に抱きしめた。

ポインとホキータ夫妻とは、昼食を終えると、夫妻のアパートのバルコニーに、腰をおろしていた。荷を積んだ

ゴンドラが通つたり、ランプがともつたり、モーター、ボートが波をうねらせて、ガラスのようなうずを巻いて走つたりするグラウンド・キャナルをながめながら。季節が早すぎるので、今のヴェニスでは、なにもすることがなくて、墓場のようにさびしいと、ホキータが言つた。ただ子供たちと会つて、子供たちをエンガディンカレイジンかへ送る前に、一わたりながめておくのには、手頃なところであるというのであつた。なぜここに滞在しないのかと、ポインが聞いた。すると、ジョイスは、白い肩かたについた黒衣の飾りひもを動かして、肩をすくめて、クリフは少しもじつとしてゐることのできない男で、もしやろうと思えば、ヴェニスの町を赤く塗ることさえ、やりかねないと答えた。

「今時、どこでそんなにベンキが、手にははいるものか。——では一つ、テリーの家庭教師のことも、相談をしますかな。マーティン君、旅行中に適当な男に会わなかつたかね。大学生とか、そういつた人間に。」と、ホキータが聞いたが、マーティンは知らなかつた。

けれど夫人が白い腕をさし伸べて、グラウンド・キャナルに煙草たばこの灰を落しながら、

「私、存じてますわ。」といつた。

「へえ、お前が知つてる。」と、夫は当てにならないという顔つきで笑つた。

「その人は、たしかによい人ですよ。もし私たちが、うまく承知させることができれば。」

「そうか。それは驚いた。お前、どこでその男を掘り出したのかい。」

夫人は、少しの間だまつていてから、こう答えた。

「私、その方と美術館へ行つたことがあります。私がヴェニスを見物したのは、その時が初めてでしたの。ファニー・トラデスチさんが、御自分の息子さんたちの家庭教師になさろうとして、イギリスから連れていらしたのです。ところがあの方は、ここがおいやになつて、バリへお帰りになつたのです。その人を置きざりにして。名は、ジュラルド・オームロッドとおつしやいます。」

「そうか、ぼくが承知させて見せるよ。ファニー君は、まだその男との契約の始末をつけてはいまいと思うが。」

「ええ、クリフ、そうなのですよ。でも、その人は、とてもお高くとまつていてよ。あなた、あの人とは、そんな調子で、お話なさらない方がおよろしいわ。」

「なんだ。給料はいくらかと、その男に聞く時の調子かい。」

「そうやって、力いっぱいにおつしやることよ。ご自分ほどにお金を持つていないものは、だれでも、つんぼだとも思つていらつしやるように。」

「ほう、そういう寸法か。よし、では、お前の思うように、その男と取りきめをしておくれ。ぼくは、町を一まわりしてくる。マーティン君、いつしよにこないか。そうかい、じゃ失敬するよ。——君は子供たちといつしよに、あんなきかない宿に泊ることはないじゃないか。マネジャーを呼んで、部屋を都合させようか。——そうか、ではご随意に。君とジョイスとで、明日の見物の予定でも作つといてくれたまえよ。だが、美術館だけは、御免をこうむるよ。——おい、行きがけにちよつと、チツプストーン・ホキータ君のお顔を拜んで行つてもいいかい。ほら、ぼくのくつは、鳴りやしないよ。——じゃ、どうでもいい。出かけてくるよ、とにかく——」

ボインのかたわらで、バルコニーによりかかっているジョイスの姿には、ボインが青年であつた時のかの女の面影おもかげも、また新婚当時の若々しいジョイスの面影も見られなかつた。あの時分のかの女は、大きくて、ふとつていて、ばら色で、巧まない感受性を持つていた。今のかの女は、固くて小さい精神の髓ねじりの周囲に、半透明で、軽い肉体が残つていゝようなものであつた。

「クリフに、ニュアンスを感じさせようとはできません。」

ホキータが出て行くと、ジョイスは自分の巻たばこを見つめながら、こういつて、ボインの方を向いた。

「でも、これからは私たち、色々とお話ができますわ。昔のように。」とひじかけ椅子にかけなおして、ジョイスは落ちついた一種の金属性の声で、しゃべりだした。それは金米糖のあられのように、ボインの頭の上に注がれた

ジョイスとクリフとが、またいつしよになつたことを喜んでくれたマーティンの親切は、身にしみてうれしかつた。ジョイスは自分でもそれを喜んで、チップのことを誇りと思つている。それからまた、クリフの弱いところは認めてゐるし、いつでも認めてきた。二人の間が最も険悪であつた時でさえ、そうであつたのだ。人でなしのラクロスという女にひつかかつて、クリフがすつかり墮落してしまつた時、ジョイスは、クリフをもとへ引きもどすのが、自分の義務と信じて、そうしたのである。それは結婚の神聖と異なることを信じていたからである、かの女は言つた。マーティンにも、それを信じてほしいと言つた。もしあなたが信じて下さらないとしたら、社会はどうして保たれて行こう。それと同じことで、一人の女が一人の男と暮らして、しかもその男がほんとうの夫なのに、一方が一方の理想をこわすと考へついたら、なんという恐いことであろう。マーティンさんは、恐いとは思わないのかとも言つた。

いかにも、マーティンもそうは思う。しかしながら、よい子供がいく人もあるのなら、どんなに大事にかかえてきた理想でも、それととりかえてしまつてもよからうと思つたと答へた。ホキータ夫人は、昔を思わせるような、ほがらかな声で笑つて、自分もそう思うといつた。しかもそれは、ジュデイスが、身をもつて示したことであつた。このことは、マーティンには、とてもわからないであらう。ジョイスがボンデルモントにだまされて、文字どおりの泥沼の中をひきまわされていた時、あのジュデイスが、どんなにすばらしい働きをしてくれたかは。

「あなたにさえ、お話のできないような、いろいろのことがございました。」とだけ、ジョイスは言つた。

「ジュデイスさんの知らないようなことでしょうか、それは。」マーティンは、じつとしておられない思ひであつた。ホキータ夫人の肩は、思はずすくんで、また肩飾りがきらりとした。

「まあ、今時の子供に聞かせるまでもございませぬわ。生れながら、ちやんと心得ておりますのよ。ジュデイスは私にとつて、おかあさんのようなものですわ、たしかに。」

「おかあさんだとしても、家族が多すぎやしませんか。」ボインがこういうと、ホキータ夫人は、いかにもというよ

うに、ため息をついていった。

「でもあの子は、それが大好きなのです。ジニア・ラクロスのおかあさんにまでなろうといたしましたの。まあ、考えてもごらん遊ばせ。あの年で、映画のスターをしつづけようというのですもの。あの子は、ボンデルモントにも忠告をしていましたのよ。——でも、あのいやな夢は、もう覚めてしまいました。私どもは、みんなこうして、いつしよになりました。今は、テリーだけが、心配の種なのです。私、あの子が、気になつてしかたがございません。人並に勉強をしたがつているのですもの、かわいいじやありませんか。クリフにとつては、教育というものは、いつもスポーツと、競走用の自動車だけなのです。私が、どうしてこんなに失敗したかといひますと、理由の一つは、そこにございます。私がなくした機会のすべてを、テリーに持たせたいと決心いたしました。先ほど私が申し上げた先生のジエラルド・オームロッドさんに、あしたお会下さいませぬ、マーティンさん。その方は、名家のお出で、それはそれは強い感じの方で、とても理想家なのでございます。私、ほんとうに美というものがわかる、どなたかの目を通してヴェニス見物ができたらと、それが残念でございます。テリーのことについて、あの方とよく御相談下さいませぬか。それからバンだつて、あの子にも、物の道理を教えて頂きましょう。もうスコープにも、手におえなくなりかけていますから。どうぞマーティンさん、お考えどおりに、サラリーをおきめ下さい。」

この日から二日たつて、ボインは、ベンション・グリアニの古くさい庭で、ジュデイス・ホキータといふしよに、ぐらつく食卓で、朝のコーヒーを飲んでいた。ボインにとつて、ヴェニスでの最後の日であつたので、ジュデイスと静かに話したかつた。今このホキータ一家は、大潮のように感情がわき立つていた。サン・ジョールジョーにつなぎ放しになつているモーター・ボート「ファンシー・ガール」号と、フシナに遊ばせてある、いく台かの自動車を持つたホキータ夫妻を初めてとして、マーセリアからの新しい首飾りのことで、けんかをしているピーチーとジニーのことについて、この夏の新しい問題を持つているスコープにいたるまで、みんながボインの忠告か、同情か、慰めかをもたらおうとしていたのであつた。こうしたことは、皆骨の折れることの上に、小ホキータたちがまつわりつくのでと

でも落ちついていることはできなかつた。でもボインは、その両親のすすめを拒んで、パレス・ホテルへは行かないで、ここに荷物を運んできたことがうれしかつた。パレス・ホテルの設備は、きらいではなかつたが、そこに出入りをしてゐる人間のことを考えると、虫^{むし}が走つた。

ジュデイスも同じ考えを持つてゐることが、わかつた。ホータ家の末子だけが、両親といつしよに、ぜいたくなホテルに泊つて、あとは場末の下宿に追ひこめられてゐることに、ボインは、少からず憤りを感じた。ジュデイスもそう思つてはゐるのだが、今こうしてゆつくりと話し合つてみると、小ホータたちは、両親に会つても、別に感情をそこねてゐないことが、ボインにわかつたのである。

だが、ブランカは最初に少し氣にしたようであると、ジュデイスが言つた。かの女は、ジョイスやクリフがチップをちやほやすると、いつもやきもちを焼いた。その上スマートなものが好きで、いつもホテルの食堂にいるシツクな婦人たちの、新しい服装に目をつけていた。ジュデイスが、パレス・ホテルへ行くのをきらつたのは、たしかにブランカのためであつた。

「あの子が、ビアリッツのリフト・ボーイとエンゲージしたものですから。」と、ジュデイスは言つた。

「エンゲージをしたつて。やつと十一じやありませんか。」ボインはあきれていつた。

「あら、私だつて、ブランカぐらいの時に、エンゲージしましてよ。スケート・リングのボーイさんと。」と告白するジュデイスの小さな顔は、若い時分の甘いおろかさを思い出す中年者のような悲しみを浮べていた。

「その人は、かわいいスウイスの男の子でしたの。私は髪につけていたリボンを、一つあげただけですし、その子は、私に制服のボタンを一つくれました。そしてお休みになつて、その子がお家へ帰ると、乾したみやまうすゆき草と、カードにおしたわすれな草を送つてくれました。でも、今の子供はちがいます。ブランカの相手の子は、石のはいつたほんとうの指輪をくれたつていいですの。それにふとつていて、鼻のまがつた、いやな子でした。テリーと私は、がまんができません。スコープも見つけて、おかあさんにお手紙でしらせるつて、大おこりしています。です

から、私たちは、ここにいらっしゃる方がいいのです。ほんとうのところ、私
 はおとうさんにお手紙で、いくら子供たちが騒いでも、だれもなんと
 もいいせんから、ここにいます。それに、ここは面白
 うございますわ。そうお思いになりませんか、マーティンさん。「マ
 ーティンは、自分の名を、新鮮なふるえ声で呼ばれると、うれしかつ
 た。」

(つづく)

(お知らせ)

絶版のため久しく御迷惑をおかけして
 おりました「幼稚園真諦」―倉橋惣三先
 生著(B6判・美装・一四六頁・定価一
 八〇円)―が、このほど改訂復刊いたし
 ました。

なお御註文御申込みは、フレイベル館
 本社、又は各地方保育園宛御願ひ致しま
 す。

フレイベル館

幼児の教育 第三巻 第八号

定価 金五十円

昭和二十八年八月一日発行

東京都中野区千光前町一〇

編集兼 倉橋 惣三
 発行者

東京都文京区大塚町三十五

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村町五番地

印刷所 凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町二ノ五

発売所 株式会社 フレイベル館

振替口座東京一九六四〇番

○本誌御購讀について注文申込その他はすべて発売
 所フレイベル館宛願ひます